

# 何語で話しているの



ローマのコッロセウム。かつて人とライオンを戦わせてそれを見物したというが、私が訪れたときは野良猫がいっぱいいた。

初めて参加した国際会議は、一九八三年、マレーシアのペナンで開かれた放射線に関する国際会議であった。英語で発表する最初の場合であった。『初めて英語で講演する人のため』と称する書物に「もし質問されて分からない場合、この講演を終えてから個人的に議論しましょう」と答えなさい」と書いてあった。これで質問はなんとかなるが、なんといっても肝心なのは英語そのものである。私は知り合いの外国人に自分の発表原稿をみてもらい、その人の訂正を受けて、最終稿を少し遅いスピードで吹き込んでもらった。それを何回も何回も聞いてまねて練習した。

学会期間中、毎晩地元の名士による歓迎会が開かれた。発表の前の晩のパーティーで、グラス片手にマレーシアの青年が私に寄ってきた。おまえは日本から来たのかと訊ねられたので、そうだと答えると、「今日の日本のXX大学の先生の英語はひどかった」とだけ耳元でささやいて去っていった。恐ろしいところに来たと思った。

翌日、無事発表を終えると、一人だけ手が上がり質問があった。教科書にあったとおり返答し、会場のかたすみで質問になんとか答えることができた。

学会が終了しペナンからマレーシアの首都のクワラランブルに移動し、友人のラ

ウさん宅におじゃました。彼の家には奥さんと男の子が二人いた。ラウさんは私の英語の程度にあわせて話してくれるので、なんとかスムーズに話ができる。二人の話を聞いていて奥さんが「何語で話しているの」と言った。絶句！ それでもおかしなものでそのうち三人で話が通じるようになった。

翌朝近くに住む奥さんの妹さんがやってきて、われわれ三人でしゃべっているのを聞いて、同じことを言った。「何語で話しているの」

あれから二〇年以上たった。今はそれほどひどくはないと思っている。電話で話すこともできるようになったし、まあまあグッドだと言ってくれる人がたまにいる。

「何語なのか」ということについておもしろいことを経験した。

ローマの有名な観光地を観光しているとき、盛んに話しかけてくるイタリア人がいた。何を言っているのかさっぱり分からなかった。アリデベルティーやバンビーノやチャオーという風に、つまりイタリア語風に聞こえていた。それが突然「オミヤゲワイカガデスカ」と日本語で聞こえた。話しかけてきたおじさんは私が理解したことが分かったようで嬉しそうだったが、申し訳ないけれどお土産は買わなかった。

親子四人でインドに行ったとき、二週間ほど過ごし、あとは帰国するだけ、空港で出国手続きが始まるのを待っていた。アジア系の顔つきの人がわれわれ夫婦に話しかけてきたが、二人ともその人が何を言っているのかさっぱり分からない。私には強い訛りのあるインド英語に聞こえた。妻も怪訝なような顔をしている。二回ほど同じことを訊かれたとおもう。それが、ローマの時と同様、本当に突然日本語で聞こえてきた。「日本に帰る飛行機はここでいいのですか」日本語で語りかけてくれたのに、それが英語に聞こえたのは実に不思議なことであった。

(二〇〇五年十一月十一日)